

転生しまして、  
現在は侍女でございます。

7

折角こうして  
会えたのも、  
もっと親しくしたいわ

### アリッサ

バウム伯爵夫人でアルダールと  
ディーン之母。二人の息子の恋  
を優しく見守る。

まあ、狼は  
いるけどな

### アルベルト

クーラウム王国の王弟で、プリメラの  
叔父。飄々としているが、ユリアのこと  
を兄のように気にかける一面も。

お久しぶりです、  
アルダールさま。

### ライラ

バウム伯爵家の使用人で、アルダール  
の教育係を務めていた人物。アル  
ダールに執拗に冷たく接するが――。

### ミュリエッタ

ゲームのヒロインで、ユリアと同  
じ転生者。アルダールのことが好  
きで、ことあるごとにユリアたち  
の前に現れる。

あたしだったら、  
あの人を自由にしていあげられるはず

何かあったら  
頼ってくれるかい？

### アルダール

バウム伯爵家の長子で近衛騎士。  
恋人のユリアへの熱い気持ちを  
隠さない。

……私はアルダールを  
信じています

### ユリア

王女宮筆頭侍女として、プリメラに  
仕える。有能だと思われるが、  
恋愛ごとにはまだまだ疎い。

この後二人で観劇してから  
戻ることにしたの！

### プリメラ

クーラウム王国第一王女。ゲー  
ムでは悪役令嬢になってしまう  
予定だったが、ユリアの奮闘に  
より才色兼備な姫に育った。

登場人物  
紹介

## Contents

	プロローグ	6
第一章	役者が揃 <sup>そろ</sup> った	16
幕間	何かが、ひび割れる音がした	65
第二章	いざ、湖へ!	76
幕間	きつねがり	108
第三章	雨降って地固まる?	118
幕間	ある少年の挑戦	181
幕間	笑みを深める	189
第四章	予定外のご挨拶	200
第五章	お見送りのお茶会	260
幕間	いつかを描く少女	309
第六章	あなたと、わたし	315
番外編	不器用にもほどがある	357
番外編	幸福論	363



## プロローグ



実家への帰省から戻って、ようやく慌ただしい生活も一段落いたしました。

親戚付き合いが切れるわけでもないパーパス伯爵家に関しては、少しだけ頭が痛い問題ではありますが……それを考えるのはこれから当主となるメレクと、両親でしょう。

姉として、または娘として協力を求められたら全力で応えようと思っておりますが、それ以外では余計な手出しはしなもりです。

アルダールとの関係も順調ですし、色々順風満帆まんぱんです！

いや、まあ旅行先でミュリエッタさんがちょっとした騒動を起こしたのはどうなることやらって感じですが……私たちが悪いわけではないので気にすることではないのですが、こう、不思議なことに彼女との縁はなかなか切れないですね……。なんでだろう。

とにかく、そんな感じですよやく普段通りの生活が戻ってきたと思います。

そんな中、プリメラさまから狐狩りのお話を伺うかがって、私は準備のために王子宮おともむに起き、打ち合わせをすることにしました。

そして、私は驚くことを王子宮筆頭から伝えられたのです。

なんと私に対して『狐狩りの際は子爵令嬢として参加するように』と、王太子殿下からご指示があったときたもんだ。

それ、伝言で済ますような内容ではないよね？

思わずびっくりして無表情になってしまいましたよ！

王子宮筆頭がそつと視線を逸らしたけど、私は悪くありません。

「え、狐狩りって再来週の話ですよね」

「ええ……その、貴女あなたも自分の業務があるのに大変申し訳ないのだけれど、王太子殿下はそのようにお望みだし、調整していただけないかしら……。その、本当にごめんなさいね……」

「……わかりました」

私にとって先輩でもある王子宮筆頭が、恐縮しきった様子でしたし……表向き、彼女のお願ねがいみたいな空気になってますけど……これって実質、王太子殿下からの命令ですからね。

承諾しょうたくする以外、道はないんだから仕方ありません。

しかし本音を言えば、参加させたいなら事前に連絡をくれと思いません？

報・連・相は大事です！ 声を大にして言いたい！

確かに今は特別忙しい時期でもないですし、大きな行事もありません。

だから仕事の調整はしやすいとは思いますが。王女宮も今は人員が増えて後輩たちもすっかり頼もしいですから、任せることに不安はありません。

きちんと指示を残しておけば、後は大丈夫だと安心して任せられますとも。

とはいえ、ですよ！

だからって、『じゃあ参加で』って簡単にできると思うなよって話です。

こちらら社会人で一応責任ある立場にいるんですから、それなりに仕事も忙しいのです。

再来週なら子爵令嬢としての私に招待状の一つも送ったり、人を寄越したりできましたよね？  
それを王子宮筆頭と相談する際にでも伝えておけて……。

アナタそれはちゃんとした連絡とは言いませんよ！ と、物申したいところです。

……まあ、相手はやんごとなきお方ですから、私から苦情を申し上げる機会などありませんけどね！ 機会があっても直訴なんてできるはずのない身分差の壁ってやつです。

こういうところが宮仕えの悲しいところ……。

(まったくもう！ 私は侍女としてついていくだけで良かったのに)

こういう事情ですからね、きっと王女宮のみんなも嫌な顔なんてせずに協力してくれることでしょう。ただ、申し訳ないのでまたチョコレートやグミを買って渡したいと思います。

(プリメラさまだったなら！ こういうとき、事前に『ごめんね』って言いながら調整してくれるよう、きちんとご自身でお伝えくださるのに!!)

……そういうところはプリメラさまの方が断然気遣いのレベルが高いですからね！

プリメラさまはきちんと私たちに対しても優しく接してくださいし、だからこちらもやる気倍増ってなもんですけども。

(王子宮殿下もちょっとは妹を見習え！)

とりあえず心の中で文句を言ったところでどうにかなるわけではありませんので、私はその件を了承してプリメラさま側で準備するものを確認することになりました。

基本的に当日の狐狩りは親しい身内で行う程度なので、随従する人員は多くない方が望ましいと王子宮殿下は仰っていたそうです。

そのため、王子宮側では少人数の給仕担当者と護衛、それに狐狩り用の犬とその調教師という構成でいくのだそうです。それとお客さまですね。

「お客さまはバウム家のご兄弟と聞いています。ですから、貴女も自由に動けた方がなにかとプリメラさまも気兼ねなく楽しめるのではないかと王子宮殿下のお心遣いでして……」

「さようですか」

王子宮筆頭からその説明を聞いてなるほどと思いましたね！

アルダールも一緒だから私を子爵令嬢として招いたとかそんな配慮、いらないから！

(なんだ、そのお膳立てされてる感じ!!)

こうもあからさまだと、照れるよりもなにか裏があるんじゃないかって心配になるじゃないですか。人間不信になりそう。

まあ、バウム家の兄弟を招くということで、当然あちらからも護衛が来るのであまり人数が多くなっても困る……というのが人数を絞る理由らしいです。

なんでも、王子宮殿下はディーンさまが将来、バウム家の当主として、また義弟として、己の右腕となるであろうと大変、期待しているのだとか。

そして同時にアルダールがどんな人物なのか知りたいのですが……。

(勿論、有能な人材を手元に置いておきたい、という前提はあるんでしょうけど)

それ以上に、彼がディーンさまに今後どのような影響を与えるのか。

今後、国を運営するにあたり、ディーンさまが自身の右腕に足るかどうか、兄弟の存在がどのように影響を及ぼすのか、危険性はないのかなど、まあとにかく色々と深くお考えらしいです。

(え、考えすぎじゃないかな?)

それを聞いて、私は心の中で盛大に驚きましたけどね!

(少し慎重すぎじゃないかしら……? そんな先のことまで考えると)

まあ、将来国を背負う立場なのだから、そのくらい慎重でもいいのですが……。小心者の庶民派である私からすると、ただただ、驚かされるというか。

アルダールが大事な弟であるディーンさまに対して悪い影響を及ぼすような振る舞いとかはしないと思いますし、心配なんていらぬよって私は思うのですが。

普段から良き国王となることを常に意識し行動しておられる王太子殿下ですから、今の内から多くのことを見定めたいという思いが強いのもかもしれません。

……とまあ、そんな風に王子宮筆頭が言っていました。あくまで王子宮筆頭の意見なので、私としては話半分……いえ、八割くらいの感じで聞いておきました。

志を高く持たれることは素晴らしいと思います。ええ、素晴らしい。

ですが、広く視野を持つのも大事ですが、報・連・相など小さなことにも是非目を向けていただきたいなど考える私はだめでしょうか。

まあ、おそらく王太子殿下はそのあたりも理解の上でやっているのではないのでしょうか。

(しかしアルダールも個人……というか、バウム家の長子という立場で参加するってある意味、貴重な姿よね。あまりそういうの好きじゃなさそうだったし)

初めて会った時もディーンさまの兄という立場で王女宮を訪れましたが、その時は近衛騎士隊の服装でした。今回は王太子殿下のお誘いということで『バウム家の長子』らしい装いで来るので

しょうか。それはそれで楽しみです。

そこで隣に並ぶのがファンディッド子爵令嬢としての私……って何故だ! おかしい!!

いや、答えはわかってますよ。

プリメラさまには話し相手が必要。で、私はプリメラさまから信頼を得ている人間でなおかつ、狩りの参加者であるアルダールの恋人っていう、うってつけの人材ですもんね……。

ピアンカさまをお招きしても良かったのですが、恐らく王太子殿下は本当に少人数で狐狩りという名目の、見定めをしたのではないかなと私は思っています。

(ただね? うん、どうしてもね、納得できないっていうか?)

ええ。気になることがあるんですよ。

まあ色々事情は理解できてますし、社会人ですし、飲み込むことくらいできます。

そしてニコラスさんがいるのも王太子殿下の専属執事なのだから当然ですよ。

勿論そこも理解しておりますし、想定だとしておりますとも。私だって王城に仕えて長い、ベテランの一人だと自負しておりますから。

王弟殿下がご参加なのも、まあわかりますよ。

(甥っ子姪っ子と過ごしたいって他にも、色々また理由があるんでしょうね、きつと)

そのところは突っ込みませんが、変に巻き添えをくらうのはごめんです!!

他にも誰か誘われているようですが……そちらは教えていただけませんでした。

王女宮筆頭である私にはある程度事情を把握してもらった方が助かるが、基本的にはお客扱いなので詳細はちよつと……ということでした。釈然としません。

まあ、王子宮筆頭もお仕事で王太子殿下に色々指示を受けているのでしよう、私だってその立場であれば従うしかありませんから、駄々をこねたりなんかしませんよ！

あまり考えないで、当日の自分がすべきことを考える方が建設的ですね。

(……狐狩り自体はプリメラさまも私も不参加なのだから、動きやすいドレスかしら)

プリメラさまは狩猟に興味はないときっぱり仰っていましたし、まあテーブルを用意して私としやべりをしながら待っていたらだくつてことなのでしょう。

だから服装は軽装のドレス、ということでもいいと思うのですが……。うーん、難しいな！  
プリメラさまのドレスは悩ましいのですが……。問題は私です。

(いや、まあ、あの服ならなんとか。そうよ、夜会とかよりは難しくない)

ただ王太子殿下の御前に立つには少しラフ過ぎないかなとかもうちょっといい物を着た方が……いやいや待つんだ、公式の場じゃないんだって。

「おやユリアさま！ 奇遇ですね!!」

「……ニコラス殿……」

考えながら王女宮に戻る途中、朗らかな声に呼び止められて私は声のする方を向きました。気が付かないふりをして良かつたんですが、その程度では相手がめげないことはわかっています。案の定、笑顔で私の横にきましたからね。

なんせニコラスさんの勤務先は王子宮なのだから、いてもおかしくはないし。

(奇遇も何も、私が王子宮に来ていたことは知っていたんじゃないの?)

予定を聞きに筆頭侍女同士が会話をしているのは別に隠してなんかいなかったから、私が戻ると

なれば王子宮筆頭からそのことを彼が聞いたとも思えるし。

とはいえ、わざわざ追っかけてきてご挨拶、なんて可愛げがこの人にあるとは思えない。

思えないけれど……じゃあなんでここにいるのって聞かれると、ほんつとニコラスさんって得体が知れなくて何を考えているのかがわからないのよねえ。

「いやいや、そんな目で見なくても良いじゃありませんか。ボクらは仲間でしょう?」

「そのようなものになった覚えはございません」

「いやだなあ、王家にお仕えするという点ではみいーんな仲間ですよ」

「……それで、なんのご用ですか」

「いいえ、ただお姿をお見かけしたのでご挨拶に!」

相変わらず、初めて彼と会った人物ならきつと好印象を抱くであろう笑顔を浮かべています。

にこにことして、朗らかで、人懐っこい……そんな印象を与える表情です。

そんな相手を、初見から嫌う人は少ないと思うんですね。

しかし私としては初対面の印象そのままだから、やはりただただ胡散臭いだけなんです。

そんな風に私が思っているからなのか、態度に出ていたのか。

ニコラスさんは小さく苦笑を浮かべました。そして私の手を取ったかと思うと、空いているもう片方の手を胸に当ててまるでダンスを申し込むかのように軽くお辞儀をしました。

「謝罪いたします、ユリアさま」

「……ニコラス殿?」

周囲を憚るよ様に声を落とし、彼はそっと私に向けて謝罪してきました。え、謝罪?

思わず驚いた私に、彼は手を取ったまま、少しだけ身を寄せてさらに声を落として続けました。「ボクはありとあらゆることを疑い、そして晴らし、王太子殿下のお役に立つことが役目です。それゆえに、貴女に不快な思いをさせたことを、お詫びします」

「……」

「貴女に嫌われたくないんですよ、そこは本当です」

今までのニコラスさんの口調とは違う、落ち着いた<sup>こわや</sup>声音。

相変わらずうつすらと笑みを浮かべた口元と、糸目なところは変わりませんが……本当によくわからない人だな。

でも、この人は王太子殿下のためにならなんでもする立場だということを、私に明かした……とまあ、そういうことですよ。

少なくとも敵ではないと、私も思っております。

今までの態度とかはただけませんが、受け入れないのも大人げない、か……。

「では……。過剰にからかうような言動などは、今後は控えてくださるとお約束いただけますか」

「ええ、約束いたしますよ。ユリアさま」

「……それならば、謝罪を受けます」

「ありがとうございます！」

私の言葉に笑みを深くしたニコラスさんが、握ったままの私の手を持ち上げて手の甲にキスを落とす。くっ、騎士とかじゃないのにえらい様<sup>さま</sup>になってるな！

やっぱりこの世界の男性スベックおかしくない？ いや、わりと本気で。

「ユリアさまは、本当にお優しい方ですね。バウムさまがいらっしゃらなかつたら、なんていう言葉<sup>ことば</sup>を以前申し上げたかもしれません、割と本気になるかもしれません」

「からかうような言動は慎<sup>つつし</sup>むようにとお願ひしたはずですが」

「ふふっ、まあまあ。でも以前、言ったでしょう？ 他人のモノに手を伸ばすほど、下種<sup>げす</sup>な輩<sup>かた</sup>ではないんですよ。ボクは」

「いい加減手を離していただけますか」

「本当にツレないなあ！」

わざとらしくがっかりした様子<sup>ようす</sup>のニコラスさんが私の手を離し、しょんぼりとした様子<sup>ようす</sup>のままにゆるく手を振りました。

「まあ、狐狩りの際にはご令嬢としてのお姿、拝見できることを楽しみにしております」

「……当日、ニコラス殿の働きぶりも見せていただくことといたしました」

「それはそれは！ 失望させないように頑張らないといけませんね。そうそう、特別ゲストが来られるんですよ」

「特別ゲスト？ ああ、王子宮筆頭も似たようなことを言っていました」

「ええ。それはもう、特別なお客さまですよ」

彼は、にっこりと笑いました。

そりゃもうにっこりと、大きく笑みを浮かべて私に向かって朗らかに言ったのです。

「ウイナー男爵ですよ」

な、なんだって——！?

いやいや王太子殿下、できたら私、平和で堅実な侍女ライフのままでもいいんですけど!!  
巻き添えダメ! 絶対!!

## 第一章 役者が揃った

そして迎えた、狐狩りの日。

王城からさほど距離のない、それこそ日帰りで行ける王族領の森林。  
私たちは朝から馬車で移動して、そこにある館に集合しました。

避暑地っていう扱いでもあるんですけどね、そりゃもう……王族専用ってこともあってですね、  
館ってレベルじゃないよね、これ? お屋敷だよねっていう建物です。

ええ、代々王族の方、特に男性陣の中でも狩りを好む方々が利用することの多い館だと私も知っ  
ておりましたよ! 忘れてなんかないよ!

王家の女性陣も避暑地として利用した記録もあるそうですが、ほとんどが狩猟を嗜む男性陣  
だったと記憶しております。

そんな私ですが、今はご挨拶の真っ最中です。

誰にかつて? そりゃもう、今日の狐狩り主催者である王太子殿下にですよ。

「来たか。ご苦労」

「王太子殿下、本日はお招きにあずかり光栄と……」

「良い、公式の場でもないからな。急な誘いで悪かった、ファンディッド子爵令嬢」

「勿体ないお言葉にございます」

「パウム家の兄弟はすでに着いて部屋で寛いでいる。妹と、他の客人が到着するまでの間、お前  
もゆるりと過ごせ」

「お心遣い、痛み入ります」

到着と同時にお目通りをお願いしてご挨拶をって、この王子さま……いやあ、ゲームほどじゃな  
いにしろ、ちよっくら俺様に育ちすぎじゃありませんかね!?

尊大な態度は、まあ……身分差だから仕方がないとして。

悪いなんて、これっぽっちも思っていないでしょコレ。

態度からみえみえですよ!!

思わず王子宮筆頭を見ましたけれど、サッと視線を逸らしましたね……?!

(まったくもう)

まあ、いいんですけどね。私にとって大事なのはプリメラさまですから!

それよりも王太子殿下の後ろに控えるニコラスさんがにこにこ笑顔でこちらをじっと見ているも  
んだから、落ち着かないわ!

(ご挨拶も済んだし……ゆっくりしてろって言われたんだから、どこかでおとなしく待っていた方  
が良さそうね)

何も見なかったことにして私は部屋を辞し、誰か侍女でも見つけてゲストルームにでも案内して  
もらおうと周りを見渡しました。

(プリメラさまはどうしていらっしやるのかしら)

私は王城で暮らしているので当然そちらから来たわけですが、子爵令嬢として招かれているのでプリメラさまとは一緒にできなかったんですよ……。よよよ。

その辺、融通利かせてくれてもいいんですが、別行動するようにと事前通達が来ちゃったらもう私にはどうしようもなかったっていうかね。

一応、プリメラさまのオマケではなく、私個人を客人として招いたという態度を貫いていることの表れだと思いますが……。いいんですよ、内々の会だっていうんならそんな風に気を遣ってくださいじゃなくて！

だってこのためだけに自領から使用人をわざわざ呼びつけるわけにもいかないの、ほっちなんですよ。安定のほっちです……。

とはいえ、きちんと立派な馬車は出していただけましたけどね！ 実家のものよりも格段に高品質な馬車にお客さまとして乗るのは、かなり緊張しました。

いやあ、うっとりするほどふかふかでした……。きつとお値段も、いや考えてはいけません。

その辺りの配慮をきちんとしてくださったことは、嬉しいです。

(でも本当だったら侍女としてプリメラさまと一緒に来られるはずだったのに……)

なんでこんなことになっているんでしょうね、悲しくって涙が出そう。

あ、でも、朝の仕事はこなしてきました。

勿論、プリメラさまの専属侍女として！

朝のお支度は全部！ 私が！ してきましたよ！！

そりゃへアメイクとかはメイナに任せましたけれど、まだまだ私がプリメラさまのお世話をするんですからね……！！

時間の都合で、お出かけのお支度を整えるのが私ではなかったのが悔しいところです。

今回ディーンさまもいるということで、プリメラさまも気合いを入れてらっしゃいました。

恋する女の子のパワー、すごいですよ！ キラキラしちゃってまあ……！

きつとディーンさまも惚れ直すこと間違いなしですよ。

(王太子殿下はすでにおられるし、バウム兄弟は到着していて、私もいるってことは後はプリメラさまだけってことなのかしら……。ウィナー男爵も?)

それにしては、部屋から出てここまで誰にも会えていません。

みんな、どこにいるのでしょうか……。

広い館だなあなんて思いながらキョロキョロと周りを見渡して、私はようやく侍女を見つけ声をかけました。

「すみません、今お時間よろしいかしら」

「はい。これは王女宮筆頭さま！ ……いえ、本日はファンディッド子爵令嬢さまでした、大変失礼をいたしました……」

「いえ、気になさらないで。お仕事、ご苦労さまです」

王子宮の侍女なのでしょう、私のことを役職で呼んでしまって恥ずかしそうにするあたり、なんとも可愛らしいではありませんか！

(そうだわ、ディーンさまとアルダールにもご挨拶しなくちゃ)

どうせ後で会うことは確定しているとはいえ、挨拶は社会人の基本です。折角ですからね、ちゃんと令嬢としてご挨拶したいじゃないですか。

「仕事申し訳ないのだけれど、バウム家のご子息方がどちらにいらっしやるか知っています？ 知っていたら、案内してもらいたいのだけれど……」

「かしこまりました、こちらです」

侍女は私に笑顔を見せて、先導するように歩き始めました。

そして歩き出した私たちの前方に、見知った方を見つけたのです。私が声を上げるよりも先に、あちらの方が気が付いてにこやかに手を振りつつ歩み寄ってきてくださいました。

「おう、ユリアじゃねえか！ お前も到着してたのか」

「これは王弟殿下、ご機嫌麗しく」

バウム兄弟のところへ案内してもらおう途中でお馴染みのヒゲ殿下にお会いしましたよ！

相変わらず無精ヒゲスタイルですけど、いやあやっぱりこの人もイケメンで直視はできないなあ。

気さくな態度で接してくれるところに、親愛の情を感じます。

……ほんとこの人、女性慣れしているっつか。

そういう態度でよそでも女性たちと浮名を流すもんだから、周囲に早く身を固めろとかせつつかれるんですよ！ まあ、ちゃんと相手を選んで遊んでいるようなので、今のところ大きな問題は起きていないようですけれどね。

勿論、この方がうわべだけではなく、本当に紳士なのは私も認めておりますけれど。

ただ、先日はどこぞの令嬢と観劇に行くからって書き置きだけして書類を大量に残したまま抜け出したってんで、戻ってから大変な目に遭ったらしいですよ。

なんでも、秘書官さんが怒り心頭で待ち構えていたって噂を耳にしましたけどね！

「アルダールのヤツと一緒に来られなくて寂しかったか？ ん？」

出会い頭の挨拶がそれってどうなのさ！

前言撤回。ニヤニヤして聞いてくる辺りは紳士じゃありませんでした。

どこのおっさんだ！ しかし下卑てはいないのはイケメンのなせる技でしょうか、それとも親愛の情がものを言っているんでしょうか。

憎めないんですよねえ、本当に。

「……そういうお言葉は慎んでいただけますと、私としては大変ありがたく」

「ちえっ、相変わらずお堅いやつだ」

つまらなそうに口を尖らせるところはまた少年のような仕草で、大人の男がやっても似合うかとんでもない人ですね！ 罪深い！！

ヒゲ殿下はそのまま私の隣に立つ侍女に向かってひらりと手を振りました。

「おう、こいつのことはオレが引き受ける。お前は下がっていいぞ」

「かしこまりました」

「それにしてもお前が来てたのに、さっぱり気づかなかったぜ」

侍女を下がらせたヒゲ殿下は壁に背を預けるようにして、その場で立ち話を始めました。

え？ 引き受けるとか言って立ち話ってどういうことなの。

思わず遠くを見そうになりましたが、ええ、不満は顔に出しません。淑女しゆくじよとしてもこういう時は不満を前面に出すのではなく、相手の様子を見ると言われているのです。

なにを考えているのかとか、どうやったら相手を不快にさせずこちらが望む行動をとってくれるよう誘導できるか……それができたら一人前の淑女なんだとか。

「王弟殿下はいつ頃こちらへ？ お忙しいのでは」

「オレはアラルバートと一緒に来たんだよ。仕事ばっかじゃ体がなまっちゃうからな！」

ヒゲ殿下は、王太子殿下と共に先にこちらにお越しだったそう。

まあ、王太子殿下も今回は主催者として張り切っておいでだという話でしたからね。

王子宮筆頭が事前にこっそり教えてくれたので知っています。

（未来の義弟と仲良くしたいなんて、王太子殿下も可愛いところがあるんですね……）

いつも王太子殿下が狩りを楽しまれる時は、王弟殿下と一緒にいることが多いです。

その腕前はなかなかのもので鹿や猪いのししなども余裕だという話も王子宮筆頭が教えてくれました。

それはもう、誇まじらしげでしたね……。

まあ、公務もありますし、そんなにしょっちゅうではないそうですが。

（そりゃそうですね、王族は公務をこなしてなんぼですから。国王陛下だってお忙しそうだとプ

リメラさまがお体の心配をしていましたから）

それでも王家の方々がいつ利用しても万事大丈夫なように、森の管理人として雇われた獵師りやうしが

常駐しているらしいです。

なので、動物たちが増えすぎるなどの問題もないんだとか。

そんな仕事もあるんですね……。世の中は広いです。

「この森にお前が来るのは初めてだったな。安心しろよ、熊みたいな猛獣はいねえし、腕利きの獵師と獵犬も揃ってる」

「……それは安心ですね」

「まあ、狼はいるけどな」

「えっ」

「安心しろよ、そっちは問題ないから」

……安心しろって言われても、それはどうなのよと思わずにはいられていませんでしたが……当然表情には出さないものの、ヒゲ殿下は私の考えなどお見通しなのでしょう。

なんと、この人ったらさらにニヤニヤ笑ってきやがりましたよ！

「心配すんなって。お前が気を付けてりや大丈夫ってこった！」

ほんほんと、まるで子供にするかのような言いようです。

安心しろと言いつつ、気を付けろって……。

（これは、からかわれたのかしら）

ちよつぱりカチンとききましたが、まあ私も大人ですからね。当然スルーです。

そんな反応が少しつまらなかつたのでしよう、肩を竦くめたヒゲ殿下でしたが、特に何かに腹を立てた様子もなく言葉を続けました。

「今回の狩りは、獵犬を使って狐を追い立てる方法だ。知ってるか？」

「一応、知識としてですが」

「まあオーソドックスな狩りの方法だが、のんびり楽しむには十分だろうな」

王太子殿下は乗馬をしながらディーンさまとの会話を通してその人となりを知りたいらしいです。まあそのあたりはアルダールとヒゲ殿下もついでなのできつと大丈夫でしょう。

……狼とか。うん、狼とか。

(そもそも、本当にこの森に狼っているのかしら)

プリメラさまが利用しないから、そこまで詳しくないのだけれど……そんな噂、聞いたことないんですけど。私が世間知らずだから少し驚かせてやろうと思つているとか……？

そういう魂胆こゑだんじゃあないよね。さすがにね！

「プリメラが到着して全員で昼飯を食つて歓談したら狩りに行く。あくまで狐狩りは集まる名目だからな、別に本当にやる必要はないさ」

「そうなのですか？」

「プリメラだって、婚約者の坊主に狐より自分の方を見てもらいたいだろうしな」

「まあ！」

それ、プリメラさまに直接言つたら、多分むくれちゃいますよ！

最近、大人のレディでありたいって背伸びしている女の子ですからね。

まあまだまだ甘えん坊なのですけれど……でも、ディーンさまと一緒に過ごしたいから乗馬用ドレスを着ると仰つたり、本当に可愛くて……。

そのやりとりを思い出して、ついほっこりしましたが、一応表情には出さずに済みました。

いやー、しかしあれは可愛かつたな……。

「まあ、我らが王太子殿下サマはあれで案外狩りが好きだからな。あいつはちゃんと狐狩りをしていくだろうが、お前らまで付き合う必要はないってことさ」

「……さようですか」

じゃあ本格的にただお喋りしゃべするのが目的？ だとしたら別に王城でも……つてだめか、ウイナー男爵も招いているのだから。あの人が王城っていう場所で王太子と呼ばれたってなるおとどと大事に捉えられそうですが、非公式の狐狩りに招かれたってだけだとそこまで問題にはなりません。

前者は次代の王が英雄を重要視していると周囲に受け取られかねないのが問題でしょうか。

(まあ民衆人気を考えたら、軽んかろじることもないだろうけど……)

今回まさかとは思いますが、ミュリエッタさんも来るのでしょうか？

一体、今回の「狐狩り」にはどんな意味があるのかと思うと、少し気が重いですけどね。

まあ私ごときがどうこう案じたり足掻あがいたりしても、きつと結局は誰かの手のひらの上で転がされていくってやつなのでしょう。人間、諦めが肝心です！

(……はあ、やれやれ)

なんて。理解のある大人のふりをしましたが、心の中ではため息ばかり。

頭ではわかっちゃいますが、私としてはただただ平和に生きたいだけなんです。

プリメラさまの侍女をして、恋愛も職場の生活も、とにかく穏やかに。

それこそ腹の探り合いみたいなものや、なにか陰謀いんぼうっぽいものを感じることがない、ちょっとと屈なくらいの平々凡々な生活こそが理想なのです。

そんな私の様子に、ヒゲ殿下は小さく苦笑して慰なぐさめるように肩を叩いてくれました。

「まあ折角来たんだ、非日常を楽しんでいけよ」

「非日常……ですか」

「おう。狩猟に興味はないだろうが、ちゃんとそんなお前たちのことだって考えてあるんだぜ。この館以外にも森の中にはいい感じの湖もあるし、お前らがピクニックするのにちょうどいいんじゃないか？ 近くに小屋があるから休憩もできるし、退屈はしないだろ」

「色々あるんですね？」

「ま、王家の男どもの隠れ家<sup>が</sup>って言われちゃいるが、嫁を連れてきたヤツも多かつたんだから夫婦で過ごせるように配慮はされてるんだろうさ」

「けらけらと笑うヒゲ殿下に若干呆れつつ、まあ王族だつて人間だからやつぱり息抜きは必要なのでしよう。それにオトコノコってのは秘密基地的なものが好きなんだよなと思いました。」

まあこの場合、秘密基地ではなく、隠れ家ですけど。

なんで私がそんな男心を知っているのかって？

昔、メレクもよく庭師の小屋に自分の宝物を持っていつて隠していましたからね！

おねえちゃんとして、そこんこは理解がありますとも……!!

「さてと。あんまりお前とくつつちゃべつてつと機嫌の悪くなるやつがいたなあ、そういえば！」

ヒゲ殿下が唐突に大声で変なことを言い出したなと思つて私は首を傾げました。

ですが、すぐにその視線がこちらではなく、別のところを見ていることに気が付きました。

つられるようにそちらに視線を向けると、廊下の先にアルダールがいるではありませんか。

アルダールはヒゲ殿下の声に苦笑しながら、こちらに歩み寄ってきました。

「……わざとらしい物言いですね、王弟殿下ともあろうお方が」

「へいへい、見てたんならさっさと声をかけりゃいいのよ……。そんな目でこつち見てるんじゃないよ、まったく……」

「王弟殿下のご歓談を邪魔するなど、とてもできませんからね」

「はっ、よく言うぜ。まったくいい根性してるよ、ホント」

二人が軽口を叩きながら挨拶をする姿に私はどうしていいのか困りましたが、ふとアルダールの後ろにディーンさまがいらつしやることに気が付きました。

ディーンさまは私の視線に気が付いて、にっこりと笑顔を浮かべて私の手を取り淑女への礼を示してくださいまして……。その成長ぶりに思わず感動でジーンとしてしまいました！

（初めてお会いした頃よりも格段に貴公子としての振る舞いが身について、立派な若君になられましたね……!!）

なんでしよう、そんな昔の話とかじゃないんですけど。

成長が早すぎてこう、感動がやみません。立派になられて……!!

感無量っていうのはこういうことなんだなあと思いました。

「侍女殿！ ……あ、いや侍女殿とお呼びするのは変かな……。とにかく、お久しぶりです！」

「さようですね……。では、どうか私のことは名前で呼んでいただければと思います」

「では、兄上に倣<sup>まね</sup>つてユリア殿と呼ばせていただきます！ 俺のこともディーンと気軽に呼んでくださると嬉しいです！」

「ばあつと広がるわんこスマイルよ……。ああ、可愛い。」

男の子はちょっと会わないうちに成長すると思ったばかりですが、やはりまだまだ可愛らしいじゃありませんか！

「今日はお会いできると聞いて、楽しみにしていたんです。お元気でしたか？」

「はい、おかげさまで恙なく暮らしております」

「と、ところで、その……、プ、プリメラさまは……ご一緒では？」

「私とは別の出発となりましたのはつきりとは申せませんが、じき到着なさるか」と

「そ、そうですか！」

私の言葉にぱっと顔を輝かせたディーンさまに、大人たち全員でほっこりしたのは当然だと思いません？ 恋する少年のこの純粹な姿！ ああ、癒されますよねえ……！！

プリメラさまと並んで座る姿、早くこの目に焼き付けたい。

「よし、それじゃあバウムの坊主。オレと馬でも見に行くついでにプリメラを待つとしようじゃないか。どうだ？」

「はい、是非！」

「それじゃあバウム卿、ファンディッド子爵令嬢のことは任せるぜ」

「承知いたしました」

ああ、そうか。今日は騎士として来ているから、アルダールも貴族令息としての立場で……ヒゲ殿下が彼を『バウム卿』と呼ぶのは、なんだか耳慣れなくて不思議な感じがしました。

いや、まあ私が子爵令嬢と呼ばれるのも、大概慣れていないんですが。

ディーンさまは去り際に私に向かって大きく手を振ってくださいました。

まだまだそういうところは男の子ですね……可愛らしい。

私もアルダールも揃って笑顔で手を振って見送りました。

「さて、ディーンたちも行ってしまったし。私たちはお茶でもどうかな」

「……アルダールはディーンさまと共に行かなくてもよろしいのですか？」

「いいさ。大体、私はユリアのことを任されたわけだしね？」

アルダールは私に向かって手を差し出しながら、ぱちんとウィンクをしてくれました。

ヴッ、顔がいい……！！ 私がこういうことをされると弱って知ってやってっているな！

咄嗟に堪えたので変な声は出ませんでした、胸が苦しくなりました。

ええ、勿論そんなことは微塵も顔に出しませんでしたけど。

よく耐えた、私の表情筋！！

「それにディーンは王弟殿下の話に目をキラキラさせていたからね、私たちに気を遣ったとかじゃなくて普通に楽しんでいると思うし、大丈夫じゃないかな」

「なら、よろしいのですけど」

さすがにあのヒゲ……じゃなかった、王弟殿下だって純真な少年に変なことは吹き込まないでしょう。何よりそんなことをしたと、後で可愛い姪っ子にバレたら嫌われてしまうかもしれないと思えば絶対やらないでしょうし、そこはきつと大丈夫です。

アルダールにエスコートされるまま、サロンのような部屋でソファに向き合って座れば、室内に待機していた侍女たちがさつとお茶とお茶菓子を持ってきてですね。

……やりおる……王子宮筆頭、さすがの教育ですね。行き届いている！！

ま、まあ？ 王女宮だつて負けていませんか？

スカレットとメイナだつて、ぱつと察してきちんと行動できる良い子たちなんですからね！

とはいえ、ここで対抗意識を燃やしても意味はありません。

美味しい紅茶を素直に楽しむことにして、他愛ない会話をしつつお茶菓子に手を伸ばしたところ  
でアルダールがとんとんと自分の首元をつつくようにして首を傾げました。

「そういえば、今日はアクセサリーをしていないんだね？」

「えっ、ああ……いえ、ちょっと心配だったものだから」

「心配？」

どうやら私が、あのペンダントをしていないことが気になったようです。

私としては申し訳ない気分になりましたが、ここは素直に答えることにしました。

今回は非公式とはいえ王太子殿下にお招きいただいた席です。

本来ならばそれなりの格好をして参加するのが筋というものだと思うのです。

そういう点において、アルダールがくれたペンダントに、イヤリングも併せて使用するのが適しているとは思ったんですが……思ったんですが、今回はそうしませんでした。

別に公式の場ではないので、なくても大丈夫と言えば大丈夫なんですが！

これが公的な狩獵ということでの参加なら、淑女としてはどうかと思うところですが……私にも色々都合があるのです。

けれど、確かにアルダールからしたら気になりますよね……。

「だ、だつて狐狩りということでしたし」

「うん……？」

「王弟殿下の悪戯で、私も馬に乗れと言われたりする可能性も踏まえてですね」

「うん？」

アルダールがきよとんとしたまま私の言葉の続きを待っている姿は大変可愛らしいですけど。

いや、なんかこれ口にするのはちょっと恥ずかしいな。

だからつてここで止めたら絶対気になるつて言われるのが目に見えているつていう……!!

「お、落としたら、いや、じゃ、ないですか……」

イヤリングとかつて、ちよつとしたことで落ちてしまうことがあるんですよ。

これがどこかの茶会とか、そういう会場のものなら、落とし物つてことでその責任者に尋ねれば済みますけれどね。

さすがにここ、王族直轄領ですからね？

落とし物をしましたので探しに行つていいですかつて、気軽に問い合わせられるような場所じゃないんですよ!!

しかもそれが森の中だつたら……と思うと、大事なものを持つてこられるワケないじゃないですか！ 森の中で小さなイヤリング一個とか、まず見つかりませんよね。

（そんなの、絶対いやだもの……!!）

でもそのくらい大事つていうか、それをこつやつて口にするのはかなり恥ずかしくつてですね。

アルダールはただ目を瞬かせただけだったので、本当にそんなことは思いもよらずつて感じなんでしょうけど。

でもでも！ 私としてはかなり重大な問題だったんですよ……。

いや、まず落とさなければ良いだけの話だって言われればそれまでなんですけどね！  
でもほらなにがあるかわからないじゃないですか！

用心するに越したことはないんですよ……!!

「う、馬に乗るとは限りませんけど……ちょっと心配になったものですから」

「……そう」

くすくす笑うアルダールに、ああ全くとってこの人は！

どうしてそうやってすぐに嬉しそうな顔をするんですか、もう。

こつちが余計恥ずかしくなるってわかってやっているのでしょうか。

そんな私の心情を言えるはずもなく、話題を変えることにしました。

このままでは色々な意味でまた敗北を喫する（き）と思えませんでしたからね!!

「そういえばアルダールはウイナー男爵が参加するという話、もう聞きました？ まだいらしていないようですが……」

「ああ、うん。まだ来ていない。話を聞いた時は私も驚いたよ」

どうやら、ウイナー男爵はまだ到着していないようです。

王太子殿下が、プリメラさまとお客人の到着について言及（げんきょう）していたのでそうではないかなと思いましたが……いえ、客人がイコールでウイナー男爵というわけではないのですが、ニコラスさんの言い方を用いるなら、特別ゲストですし、お客人と呼んでも不思議ではないかなって。でも、うーん。なんだかそれも少し違うような気がするなあ、なんて……。

「どういうことなのでしょう。詳しくは聞いていますか？」

「聞いていない。バウム家としては、王太子殿下がデインと私と話をしてみたいと仰ったということくらいかな。親父殿はもう少し事情を知っているだろうけど、説明はなかった」

「そうですか……」

私が聞かされていないだけで彼らは詳しく聞いているのかと思いましたが、違ったようです。

深く考えない方がいいのかと思いつつも、アルダールは優しく笑顔をを見せてくれました。

「まあ私たちに何も言っていないのだから、親父殿としては何もしくないという認識なのだと思います。多分だけど、王太子殿下は私たちに何も求めていないんじゃないかな」

「そう、かもしれないですね」

私もニコラスさんからウイナー男爵がゲストとして招かれている、ということを目にしただけです。別に何かあるとか、不穏な話は一つもしていませんでした。

ただ何も教えてくれなかったただじゃなくて、あの胡散臭い笑顔で去っていくから余計に気になったって言うかですね……。

はっ、もしや思わせぶりの態度を取って、私が勘ぐる姿を面白がっていたとか？

あり得る。ニコラスさんとそういう意地の悪いことしそうだ……!!

（まあそれは置いておくとして。ウイナー男爵が、という言い方が引っかかるんですよね）

男爵お一人で参加ってこと？ つまり、ミュリエッタさんは招かれていない？

うーん、英雄と話がしたいなんて可愛いことを、あの王太子殿下が言うとは思えません。

失礼な言い方かもしれませんが、王太子殿下がそんな純粋な動機で招くなんて、私には到底思え

ないんですよ……。

なにせあの方はプリメラさまの兄君です。

見目麗しいだけでなく、聡明で素晴らしい才能を秘めているお方です。

そしてその力を王太子として遺憾なく発揮されていて、あの年齢でもう為政者としての物の見方をされているのだと私は知っています。

ですので、あの方をディーンさまのような純粋な少年と同じには見ることができないから、つい疑り深くもなるというもので……。

「まあ男爵については、狐狩りという名目で殿下たちが何かしら話をするんじゃないかと私は思っているよ、ただ……」

「……それがどんな話なのか、なんですよねえ」

「ユリアは何が心配なんだい？」

「何がって……」

アルダールに問われて私は少し考えました。

別段、男爵が来て私にとって悪いことは一つありません。

なんてたってただ狐狩りをするだけですし、あちらがミスをしうが何だろうが私にとって都合なこととは何もないのです。

（男爵と私は、直接的な関わりもないですし……）

ミュリエッタさんがいたらアルダールにちよつかいをかけないか、そこが心配だけれど。

うん、まあ。そこは来るかどうかともわからないのだから、心配してもしようがない？

「……プリメラさまが悲しい思いをするようなことになったら、と」

「王太子殿下は王女殿下をととても大事にしていらっしやるだろう？　なら、きっと大丈夫だよ」

「そうだと、思いますけれど……」

「ユリアは本常に王女殿下のことが大切なんだね。臣下としては当然なだけけれど……少し、妬けてしまうな」

くすくす笑ったアルダールが、お茶を飲んでウインクを一つ。

本常にそれが様になっているから困るのよね。

誤魔化すように私もお茶を飲めば、アルダールが手を伸ばして私の髪に触れました。

「ペンダントの代わりに、髪飾りをつけてきてくれたんだ？」

「……これなら、落としにくいかなと思って」

「ありがとう」

「でも落としたらごめんなさい」

「そうしたらまた買うよ。だから気にせず、いつでも使ってほしい」

いやいや、それはちよつとね？

いや、うん。気持ちは嬉しいんだけど、それはちよつと申し訳ないでしょう。

アルダールの申し出に私は曖昧に笑って、答えを濁すことにしました。

こういうやり取りではいつも負けているから、あえて言葉にするなんて下策は取りませんよ！  
私は学ぶ女なのです。

ええ、どうやったって負けるのが目に見えていますからね……いつかは勝ちますけど！

「そういうえば、森には狼が出るという話を王弟殿下から聞いたんですけど」  
「狼？」

私の問いに、アルダールが首を傾げました。

ああ、うん、その反応。そうだよね、知ってた。

「……やっぱり嘘だったんだ……」

「うーん、聞いたことはないかなあ」

「私が気を付けなければいいんだって言われたんですけど、そんなに私ほんやりしているように見えるのかしら……」

「……ああ、うん。なるほど。……大丈夫、ユリアが心配する意味じゃないと思うよ。それに、私がいるからユリアは安心して傍にいてくれればいい」

くすくすと笑ったアルダールが優しく私の頬を撫でてくれましたが、私としては笑えません。

まったくもう……あのヒゲ殿下！

折角だからと、とっておきの新作マシユマロを持ってきましたけど、あの方に出す分は少なめに  
して差し上げましょう、そうしましょう！

「オオカミ、ねえ……」

アルダールがそう呟いて笑っていましたが、私はもう気にしないようにするのです。

それから程なくして到着されたプリメラさまと、王太子殿下が仲良く並んでお喋りをしていらっ  
しゃるその光景は本当に眼福です。

目の保養！ 美しい！ 可愛い！ 素敵！

なんとということでしょう、お二方が揃ってそこにおられて微笑み合っている。

それだけでまるで世界が光り輝いて見えるではありませんか！！

語彙力がどこかに吹っ飛んでいくような感じで大変申し訳ないと思いますが、やはりね、麗  
しの兄妹なんですよ。はあ、眼福……。

その場面だけで絵画が何十枚と描けるんじゃないでしょうか。

宮廷画家が知ったら、ハンカチを噛んで悔しがらんじやないかと思うくらい美しい光景です。

王太子殿下も優しい兄としての笑顔でプリメラさまに話しかけておられますし、それを嬉しそう  
に笑って受け入れるプリメラさまもまた愛らしい……。

はあ……なんて尊いのでしょうか。

これを尊いと言わずなんと言う！！

まあそれは置いといて。

集まった我々は、王太子殿下の提案で揃って昼食をという話になり、庭がよく見える場所に集ま  
りました。まあこれは王子宮筆頭から聞いていた予定通りです。

円形のテーブルに王太子殿下にプリメラさま、王弟殿下、デインさまにアルダール、そして私  
という顔ぶれです。

本日のプリメラさまは、乗馬用のドレスでまた一段と可愛いです。

これなら絶対、デインさまもメロメロですよ！！

(まあドレスを選んでお勧めしたのは私なんですけどね！)

髪型は運動向けの編み込みスタイルで、あれはきつとメイナの力作でしょう。

私がしたのは事前準備だけで、出るまでのスケジュール管理についてはスカレットにお願いしておいたのです。だから作業を分担できてスムーズだったはず。

そして給仕についている王子宮の侍女や執事たちとは別に、王太子殿下の後ろにニコラスさん、プリメラさまの後ろにセバスチャンさん。

おや？ 腹黒い執事さんが揃って……じゃなかった、いや、なんでちらつと思っただけなのにこつちを見ているんですかねセバスチャンさん。

そんな、腹黒とか思っていないですよ素敵ダンディとっております、はい!!

セバスチャンさんからの無言の圧に私が冷や汗をかいている中、王太子殿下が軽く杯を掲げて、私たちを見回しました。

「忙しい中、今日はよく集まってくれた。礼を言う」

「お兄さまの狩りにお誘いいただくのは初めてなので、プリメラも楽しみにしております!!」

「……お前はあまり狩猟には興味をなさそうだったからな、悪かった」

「いいえ、こうして場を設けてくださっただけで十分です」

ニコニコ笑うプリメラさまと、それにつられるようにふっと笑みを浮かべちゃう王太子殿下。

ああ、本当にこの兄妹、なんと可愛いのでしょうか……!!

思わず不躰ふしつけにも凝視してしまいそうでしたので、そつと視線をお茶の方へ落とし、優雅に飲んでその思いをやりすごしました。

ええ、私もちゃんと場をわかま弁えておりますからね。

空気が読める女として、褒めていただきたいところです!

そして視線をちらりと動かせば、自分もプリメラさまとお話したいっていう空気を隠し切れないうディーンさまのそわそわつぶりが目に入ってもうね、……もうね……!!

(ああー。なにこの空間、尊い……尊すぎる!)

何度でも言いましょう、この空間は癒しに満ち溢あふれています。

勿論、大人の女として、社会人として、デレデレした顔は見せません。

これまで侍女として培つちかった冷静な表情を保つ、というスキルがこんなところで役に立つだなんて思っています。いやあ、何があるかわからないものですね。

プリメラさまに信頼される侍女としても、令嬢としても、ここでニヤニヤなんてできるわけがありませんのでとても助かりました。

不愛想とか鉄壁侍女とか、私としては不本意なあだ名ですが、こういう時には役立つものなのですね……こういう時に口元を隠すため、扇子せんすを持ってくれば良かったと後悔しております。

そのあたりが私は令嬢としてはまだまだ半人前なのですな……。

次回があるかはわかりませんが、気を付けるといたしますしう。

こんな尊い場がそうあるとは思いませんが。

(でもウィナー男爵を待たずに始めて、いいのかしら?)

私だけが男爵が参加することを聞いていたなら、ニコラスさんが私に対して揺さぶりのような何かを仕掛けてきたのかなと思うところですが……。

アルダールも聞いているとなると、別にあえて隠そうとしているわけでもないのでしょうか。

だとすると、この場にはないのはどうしてでしょう？

(遅れてくるとか、そういうことなのかしら)

その疑問をニコラスさんに視線を向けることでぶつけてみましたが、にっこりと笑顔を返されただけでした。いやいや、わからんて。

勿論私が視線を向けただけで疑問が伝わるとは思っていないんですけど！

でも絶対わかってやってるよね!!

人差し指を口元に当てて笑うとか、私の意図をあちらは確実に理解しているはずですよ。

(とりあえず、黙っているってことかしら……)

アイコンタクトとかできるわけじゃないんで、できたらもう少し何かアクションをくれませんかね!? いつもと変わらない笑顔で何を察しろと。

そう思っていると、ニコラスさんから何故か唐突なウインクが。

……。いや、糸目だからウインクだったのかという疑問はありますが、多分、ウインク……？

「ユリア、あれはどういうことかな？」

「さあ……。私にもさっぱりです」

アルダールが小声で私に問いかけてきても、私だって何もわかりませんよ!

私は無実ですよ……! なんて思いましたが、アルダールもそれ以上は特に突っ込んできませんでした。面白くはなさそうでしたけどね! ほっ、よかった……。

そんな私とニコラスさんのやりとりの間も、和やかな空間は続いていました。

王太子殿下は穏やかな笑顔を浮かべ、ティーンさまに話しかけておいでです。



「バウム公子、君とはプリメラの兄として一度ゆっくりと話してみたいと思っていたのだ」  
「は、はいっ！ 本日は、お招きいただきありがとうございます！」

「王太子としてではなく、妹の身内として仲良くしたいと思っっている。聞けば、バウム公子は私と同じ年齢だとも耳にしている。これから将来この国を盛り立てる友人としても共にあれたらと考えているんだ。いずれはバウム伯爵と同じで騎士として仕えてくれるのだろうか？」

「あ、ありがとうございます……！ 俺、じゃなかった、自分も王太子殿下のご期待に添えるよう精進してまいります！」

「そう畏まらなくて良い。プリメラの婚約者として、今後は顔を合わせることも増えるだろう？」  
「そ、そう……でしょうか。自分はこの春より学園に通う身となりますので、王城に上がる機会は今よりも少なくなると思っております」

「学園か、ではバウム公子も次期領主として多くのことを学ぶのだな」

「はい。父からは、学園で数多の<sup>あまた</sup>ことを学べるその機会を大切にせよと言われました」

きりつとして答えるディーンさまのお姿からは、お父上であるバウム伯爵さまを尊敬している様子が窺<sup>うかが</sup>えました。ディーンさまには、良い父親なのでしょう。

なんとなく、私はちらりと横に座るアルダールを見ました。

アルダールは弟の発言を微笑ましそうに見守っている様子で、それ以上はわかりませんでした。

うん、まあなんとなく家族とは上手くやれるようになったと言っても、なかなかそうまるっと変わるわけじゃありませんから……胸中複雑だったりしないのかなあって心配になってしまったんですけど、大丈夫そうですね。

（余計なお世話……か）

自分の家のガツタガタだった関係を考えると、まったくもってバウム家の複雑な事情の方が大変なんだろうなとしみじみ思います。

それを考えると、そこから家族関係を修復できたアルダールはすごいなって改めて思うっていうか……惚<sup>のろけ</sup>気じゃありませんよ、断じて!!

「近衛騎士として何度かその顔は見たことがあるが、言葉を交わすのは初めてか。バウム卿」

「は、この場に招いていただけのこと、光栄に存じます」

「若くして近衛騎士隊に入隊し次期剣聖としての呼び声も高いが、驕<sup>おご</sup>ることもなく真面目に職務に取り組んでいると耳にしている。そのような人物が王家に忠誠を誓ってくれることは、むしろこちらが感謝すべきだろう」

「……畏れ多いお言葉にございます」

「ファンディッド子爵令嬢も、よく妹に仕えてくれていて。急な誘いで済まなかったが、普段とは違う身分の方が何かと自由に過ごせるだろうと思っただからだ。二人とも今日はこの会を楽しんでくれると良いのだが」

「ありがとうございます、王太子殿下」

王太子殿下とディーンさまが同い年、とはいえ、もうなんだか貴禄がほんと段違いってというか、王太子殿下が成長早すぎるのかなって思うんですけどね。

とはいえ、和やかな始まりです。

主にプリメラさまを間に挟むようにして王太子殿下とディーンさまが楽しく会話をし、時々そこ

にヒゲ殿下が混じって……というなんだか目の保養のための会ですかねこれ？  
いえ、幸せだからいいんですけど。

狐狩りが始まったら私はプリメラさまの相手役、そしてアルダールは参加者とデイーンさまの護衛を兼ねるといふ役目があるのでしょうか、今のところ穏やかでいい感じです。

なんにせよこの尊いやりとりを目の前で見るのができるのは役得ですし、特に面倒がないんだったら全然オツケーですね！！

「王太子殿下、失礼いたします」

「なんだニコラス」

「はい、ウイナー男爵さまがご到着されたのですが、どうやら手違いがあったようで」

「……なに？」

ニコラスさんがちらりと私に視線を向けましたが、私はそれを受けてセバスチャンさんの方に視線だけ向けました。

だつて私を見られても困りますし。

ウイナー男爵のことなんて知りませんよ、なんでこつちに持つてくるんですか、あの人どうにかしてくださいよという気持ちを込めてセバスチャンさんを思わず見ちゃっただけです。

しかしセバスチャンさんは私の視線に気が付いているはずなのに決してこちらを見ず、どこか一点を見つめて微動だにしませんでした。

その姿は執事の鑑に見えますが、ただ単に厄介なことを押しつけるなつてことでしょうか。でもその厄介な人、セバスチャンさんの身内なんだからね……！！

「ウイナー男爵さまをご招待する旨を確かにお伝えしたのですが、男爵さまはご息女を伴つて到着となりまして」

「……一人で来るように伝えなかったのか？」

「はい、私めは確かにウイナー男爵さまをお招きするとお伝えしましたが、お一人では伝わらなかつたようで」

「ではお前のミスだな、ニコラス」

王太子殿下は眉を擡めて、とん、とテーブルの上を指で叩きました。

それからため息を吐いて、厳しい声を発しました。

「お前の失態について、客人らの前で話すわけにはいかない。後で覚悟しておけ」

「申し訳ございません」

どうやらウイナー男爵は私と同じように、口頭で招待されたクチのようです。

確かに慣れていない人がそんなフランクに招待されたつて、知らないことばかりで色々と段取りを間違えてしまうのは仕方ないことだと思います。

でも、ニコラスさんがそんな初歩的なミスをするだろうか……という疑問が私の頭に浮かびました。

大切なお客さまをお迎えするにあたり、そんな誤解するような言い方をするだろうか、と。

こういった場に不慣れなお客さまであることを前提として私が口頭で招待するならば、何時、どこで、誰がどうするのか、それを具体的に示すでしょう。

簡易的に、かつ相手を不快にさせないよう内容を噛み砕いて丁寧に伝える。

それをニコラスさんができないとは思えないのです。

私の疑問に答えるように、あるいは上書きするように、王太子殿下が言葉が続けました。「彼らはまだ招かれることに不慣れだからな。やはり招待状を出すべきだったか……とはいえ、今それを悔いても仕方がない。ご令嬢に恥をかかせるわけにはいくまいし、客間でもてなせ」「かしこまりました」

「ウイナー男爵には私自ら説明しよう。……叔父上もそれでよろしいですか」

「ああ、いいぜ。親愛なる我が王太子殿下にそちらはお任せしようじゃないか」にやりと笑ったヒゲ殿下に、王太子殿下はただ頷いただけでした。

あれっ、でも急に空気がぴりつとした気がしますけれど。

それと同時に茶番臭がするのですが、気のせいでしょうか？

いいえ、多分それはニコラスさんの笑顔のせいですね。そういうことしておきましょう。

王太子殿下は真摯に男爵たちを案じておられるご様子ですし。

……まあ、ヒゲ殿下は違うようですが。

とにかく、ミュリエッタさんもこの館に到着したところまではわかりました。

「……ウイナー男爵さまは到着の時間が我々と異なるのですか？」

「ええ、ファンディッド子爵令嬢さま。テーブルマナーなどについてまだ不安があるというウイナー男爵さまは、狐狩りよりご参加いただく手筈だったのです。迎えの馬車も王子宮の方で手配いたしました。こちらの連絡に不備があったのやもしれません」

につこりと笑ったニコラスさんが「それではお客さまをこちらにご案内いたしますね」と去って

いく姿を見送って、私は改めて思いました。

こいつやっぱり胡散臭い……と！

いえ、勿論、顔には出しませんでしたけど。そう思ったのは、私だけではないはずだ。

その後、王太子殿下の指示で俄に館が慌ただしい空気になったかと思いましたが、特にトラブルというトラブルではありませんでした。俄に場の空気も元通りになりました。

私たちが再び歓談していると、ウイナー男爵がニコラスさんに連れられてこちらに歩んでくる姿が見えて私たちは誰からともなく口を閉ざし、そちらに視線を向けました。

ウイナー男爵は私たちの視線に気が付いたのでしよう。

彼はまだ距離があるにもかかわらず、ぺこりと頭を下げてきました。

その様子はとてもおどおどしていて、顔色も悪いように見えます。

おどおどしているというか、緊張しすぎて足がもつれそうな歩き方をして、視線は泳ぎ気味で、いかにも場違いなところに連れてこられてどうしていいのかわかりません……といった風情です。

狐狩り参加者らしい装いの、がっしりした体格の男性が身を小さくする姿は、なんだかいっそ哀れで同情してしまいます。

まだこうした場に来ることは、緊張しかないのでしょね……。

まあ、気持ちはわからないでもないです。

（私も子爵令嬢として……なんて言われると、挙動不審になりそうだしね！）

侍女としてだったらいくらでも落ち着いていられるんですけども……。

いざ、令嬢としてと言われたらやっぱり緊張して挙動不審になってしまうんじゃないかなと思う

と、そこは同情を禁じえませんが……。

ましてや、この集まりだつてただの貴族同士の集まりではなく、貴族から見ても滅多に同席なんてできない王太子殿下たちとの席なのですから、その緊張たるや推して知るべし。

「よく来たな、ウイナー男爵。非公式とはいえ急な誘いで驚いたであろう。しかし手違いがあったようではないか」

「はっ、いえ、あの……本日はお日柄も良く……」

お見合いの口上か！

思わずそう突っ込みそうになりましたが、ぐっと我慢です。

王太子殿下にお声をかけていただいて、しどろもどろな姿になった……なんて話を耳にしたら、教育係さんがまた頭を痛めるか、それとも目を吊り上げるのか。

ウイナー家の教育係という方にはお会いしたことがありませんのでどなたかは存じませんが、そんな感じがいたしますね!!

「男爵だけを招いたつもりだったのだ、許せ。貴殿の娘については別室にて、きちんとおてなすと約束しよう」

「も、勿体ないお言葉、ありがとうございます。……あ、あの、しかしながら、何故、娘はここに連れてきてはいけなかったのでしょうか。娘も私と同じで冒険者をしていたこともあり、狩りの腕に不足は……」

「そりやお前、前にも説明されていると思うのだが」

呆れ顔でヒゲ殿下が口を挟みました。

思わず、だつたんでしよう。声を上げてから、しまったという顔をしていました。

ヒゲ殿下はちよっぴりバツが悪い顔をして、ちらっと王太子殿下の方へ視線を向けたけれど、ため息を吐いて言葉を続けました。

「非公式とはいえ、こうした場に社交界デビューを終えていない娘を連れてくるのはどうかって話でな。プリメラに関しては叔父である俺と、兄である王太子。それに婚約者まで揃つてのことだから対外的にもなんら問題ないんだが」

「そ、そうなのですか……」

まあ保護者同伴だから構わないといえは構わないだろうけれど、とは私も思わないでもないですが。ヒゲ殿下が言っていることはそういうことだしね。

だけれど、ウイナー男爵もミュリエッタさんもこうした場に慣れた人たちではないし、いくら『狩りに慣れているから』といつても、まさか男性陣に交じつて狐を追わせるわけにはいかないし。だからといって私たちと残つてお茶会となると、それは……うん、ほら、生誕祭での一件もあることだし……ね。

そうなると結局、お留守番をしてもらうのが一番無難という結論に至ると思うのです。

「招待状を出さなかったのも、王家から正式に招待されたという物品が出ては他の貴族家に対して不平等となるかと思つてな。それがこのように仇となつたわけだが……」

王太子殿下のお言葉はまあ、理解できます。

ほんと出の平民上がりの貴族が王太子殿下のプライベートな時間に招かれたとあつては、厄介なことになりかねません。クレームをつけられる格好の理由を作る必要はないでしょう。

英雄というネームバリューを利用して、王太子殿下に娘を売り込もうとしている、なんて見方を  
する人がいないとは言いい切れないのです。

それほどまでに王太子の妻という座は……正妃でなくとも、魅力的なのでしょうね。正妃の座は  
すでに他国の王女と決まっていますが、寵姫ちゆうきともなれば王太子妃の一人として敬われ、将来、男  
児を産むことができれば未来の国母と呼ばれる可能性だって出てくるわけですから。

王妃にはなれなくても権力を得ることが出来るわけですね。そして、その寵姫の実家にはそれ相  
応に富がもたらされることでしょう。

だからこそ、一部の貴族たちは王太子殿下に年近い、自分の娘や近親のご令嬢たちを売り込むの  
に躍起やうきになっているって話ですが……当の王太子殿下はそれを煩わづらわしく思われているご様子。

私には、なぜみんながそんなにも権力を持ちたがるのかわかりません……。

(だってどう考えても面倒でしかないじゃない!?)

別に、平和に生きるだけだったら、権力って必要ないと思うんですよ。まあ、ある程度の財力は  
生活に必須ですが……誰かの上に立つのってそれはそれで面倒じゃないですか。

(こういうところが貴族としてはいけないのかもしれないんだけど……)

とりあえず、今回この場にいたメンバーと使用人に口止めするにしても、どこから話が漏れるか  
わかりません。人の口に戸は立てられぬと申しますから。

(いやその前に、男爵たちが他の人たちに話している可能性もあるか。……貴族のオトモダチがい  
れば、ですが)

ちらりと王太子殿下の後ろに控えるニコラスさんへと視線を向けましたが、またにっこりと笑み

を返されただけでした。

(いやいや、なんでこっち見てるの?)

偶然にしてはタイミングよくこちらに笑みを返してくるニコラスさんに、少し怖さを覚えます。

私は顔が引きつりそうになり思わず視線を逸らすようにしてウイナー男爵に向けると、あちらは  
可哀想かわいそうなほど顔色が真っ青でした。

「ウイナー男爵、今回この場に貴殿を招いたのは英雄としての貴殿に興味があったからだが、それ  
とは別に話をしておくことがある」

「は、話でございますか」

「ニコラス」

「はい、王太子殿下」

名前を呼ばれたニコラスさんが、一歩前に出て私たちに一礼しました。

そして全員の顔を見てから最後にウイナー男爵の方へと体ごと向きを変え、侍女たちが運んでき  
た椅子を指し示したのです。なんて芝居がかった所作しよさでしょう。

「王太子殿下の執事たるこのニコラスめがこれより説明をさせていただきますので、ウイナー男爵  
さまもお寛ぎくださいませ」

(いや、寛げないでしょうよ……)

私は心の中でそんなツツコミをしつつ、納得していました。

ああ、やっぱりこの場は何かのために用意された舞台なのだ。

特にあのニコラスさんの胡散臭さっていうか、いや一見するととても有能な……違うな、有能に

は違うないんだと思うんですけどね……。  
ぱっと見て違和感はない。

けど、あの人の何かこう……作りものみたいな態度がですね。  
……うん、上手に説明できないけど、違和感があるわけです。

「ウィナー男爵さまは、冒険者時代からご息女と共に苦楽を分かち合われてこられたがゆえ、どこに赴かれるのも一緒に伺っております。大変、親子仲がよろしいのですね」

「は、はあ。まあ、そうだと思いますが……そ、それが何か？」

「冒険者をしながらの子育て、ご苦労も多かったことと思いますのでこのニコラス、その話を耳にいたしました時には感激したものにございます！」

「そ、そうですね？ それほども……」

ニコラスさんの芝居がかったわざとらしい贅辞に、ウィナー男爵は素直に照れています。

えええ、絶対この人カモられるタイプの人だ！

うちのお父さまと同じ系統の人だ！

いや、それとも違うか……なんていうか、素直な人っていうか、純朴な人だ。

絶対、城にいる人たちにいいように手のひらの上で転がされちゃうタイプの……。

「ですが、男爵さまは叙爵を受けられ、これよりはクーラウムを担う貴族の一人として尽力くださる運びになりました。これからはご息女はご息女の、男爵さまには男爵さまの、それぞれの道を歩んでいただかねばなりません」

「……えっ？」

饒舌なニコラスさんの言葉に、椅子に座ってひと息つく間も与えられなかった男爵は目を白黒させています。

そりゃそうでしょう、褒められたなと思っただらいきなり、それぞれの道を歩め、ですからね。

急にそんなことを言われても一体何のことだっぴっくりして当然です。そもそも、今起きている状況ですら飲み込めていないのに立て続けですし。

しかしそんな男爵の様子を気にかけるでもなく、ニコラスさんは続けました。

「今までは交渉ごとなどもご息女が共におられ、互いに支え、補い、助け合うという素晴らしい美しい親子愛で過ごしてこられたことと思います」

「え、ええ……」

「ですが、これよりは男爵という地位に見合ったお立場として、別個に人を雇い、使うなどしていただければと思うのです。そう、王太子殿下にお仕える執事であるこのニコラスのようなものがございますね」

私だったらこんな胡散臭い人に仕えられるのはちよつと……って思いますけれどね。

まあ王太子殿下クラスになると、このくらい腹に色々なものを抱えていそうな人も軽く扱えないとあれなんでしょうか。

(ただの子爵令嬢で良かった……)

いや、子爵家でもそれなりに人は使いますので、ニコラスさんは特例中の特例っていうか、世の中にあんな胡散臭い人がぼこぼこいても困るか。

可愛い弟であるメレクには、くれぐれも人を雇う時には気を付けるようにアドバイスしたいと思

います。あの子、あれでまだまだ純真ですので……。

お父さまとお義母さまもそういう意味では人を信じやすいタイプな気がしてなりませんから。ああ、実家が心配になってきました！

これからはセレッツセ家の方々もついているので、そんな詐欺みたいなものに引っかかるようなこととはなれないと思いますけれど、なにせお父さまは前科がありますし……。

そんなことを考えている私でしたが、ニコラスさんの笑顔が深まったような気がしてそちらを見ました。にこにこ顔が、ニタリ……って感じですよ。

ひえって思いましたが、声には出さずに済みました。頑張った。

「それとは別に、ご令嬢の社交界デビューについてもお話をさせていただきたく、この場にお招きした次第でございます、はい」

「で、でびゅー、ですか？」

いまだ説明されている内容に頭が追いついていないのでしよう、困惑した様子のまま男爵がその声を発すれば、ニコラスさんは笑顔で頷きました。

それは肯定というよりは否定を許さない、そういう圧を感じさせるものです。

ただ、そこまで男爵が気づいているかどうかはわかりません。

「このように申し上げると失礼に聞こえるかもしれません、男爵という地位は決して高くありません。また、個々でパーティを開くには少々資金も心許ないと思われまじし、それに加え、招待するお客さまについての人脈もないかと思えます。いかがでしょうか」

「そ、それは……はい……」

「やはり！ ですが、ご安心くださいませウイナー男爵さま。そのような思いをする貴族はなににもウイナー男爵さまだけではないのでございます。名家とその名を轟かせるような家柄の方でもない限り、皆さま同じようなお悩みを抱えておられるものでございます」

「そ、そうなんですか……」

怒涛のニコラスさんの喋りに、ウイナー男爵は目を白黒させて相槌を打つのが精一杯のようでした。王太子殿下なんて、我関せずでプリメラさまにお菓子をお勧めしているし。

プリメラさまはちよつと目を丸くしているけれど、静観することに決めたようです。

ちらちらと男爵とニコラスさんを見比べている姿は控えめに言って……んんん、可愛い。

それからアルダールとディーンさまですが、『名家とその名を轟かせる』でニコラスさんがちらりと二人に視線を向けましたが、それを華麗にスルーしていました。

うん、慣れているのかな！

名家って言われることも、あんな感じで含みのある視線を投げかけられることも、きつとたくさん経験しているのでしょうか……。

あつ、そう考えると一気に色々ニコラスさんのせいで胃が……。

なんとなくそんな風に思ったのは多分私だけなのでしょう、まあ、別の意味で男爵も胃が痛い状況だと思えます。こんなことで共感したくなかった。

「そこでご提案なのですが、適齢期となられたご令息・ご令嬢を一堂に集め行う社交界デビューのためだけのパーティを催すことが年に一度ございます」

「あ、……うちの、ミュリエッタを、そこに？」

「はい。さすが、理解が早い！ ただし、男爵さまのご令嬢は他の方々に比べると少々年上となつてしまうことが懸念といえは懸念ですが……しかしご参加いただければ、多くの方々とお知り合いになれることかと思ひますが、いかがでしょうか」

「そ、そうなのですね……是非！ よろしくお願ひします!!」

「はい、かしこまりました。今も貴族社会について勉強に励まれておいでと耳にしております。なにかとお忙しいかと思ひますが、手続き等はこちらで全て処理させていただきますので、どうか気にせず多くのことを学び、この国を支える一員として名を馳せてくださいませ」

につこおと笑みを深めたニコラスさん、嬉しそうですね！

まあそのパーティーについては私も当然、知っておりますよ。

(とういか、メレクはそのパーティーでデビューしたんだしね……)

いくら自分の家でパーティーを開かないにしても、それなりにドレスとかアクセサリーとか……結局のところお金は必要です。

うちだって領地持ち貴族ですが、領によって収益が違えばそこに差は生まれます。

ある程度近い階層って言っても、持ち物で貧富の差が丸わかりですからね！

(だからこそ、私かメレクか、どっちかにしかお金をかけられない状況だったから、迷わずメレクを行かせたんだし)

大きな社交界デビューのパーティーを開けるような家に比べればどんぐりの背比べで、後々そこで一緒に社交界デビューした仲間とは笑い話にできるらしいのですけれども。

今でもメレクはそこで知り合った仲間と文通しているそうですよ。

そういった貴族のお財布事情、ウイナー男爵はこれからどうやって工面するのでしょうか。

(でも、これでなんとなくわかったかも)

王太子殿下が指示したかどうかまではわかりませんが、ウイナー男爵とミュリエッタさん、それを切り離し独立させようって魂胆ですね！

親子べつたりじゃなくてそれぞれに頑張りましょうねって感じで綺麗にまとめてますけど。

(多分、そういうことで合っているはず)

まあ、それはそれでいつかはそうなるのだから慌てて誰かがお膳立てするようなものなのかしらって感じがしますが、ミュリエッタさんの年齢的にもおかしな話ではないからすごく良いことづくめのように思えます。

貴族になりたてでデビューについて援助ではなくそういうやり方もあると教えた上で、面倒な手続きは全部やってくれれば、ウイナー男爵としては断る理由なんてないでしょう。

要するに、メリットしかない状態なんですから！

(でもわざわざここまでお膳立てするつてことに、裏の意味がある気がする)

そんな風に思いましたが、私とその裏の意味まで知る必要はきつとないのでしょうか。

多分。うん……多分ね！

ちょうどいいから私のことも巻き込んで使おうなんて王太子殿下はお考えにならないはずですが、ただほら、ニコラスさんが不気味なんだよなあ！

なんとなく今、彼の方を見ると、あの胡散臭い笑顔がこちらに向いているような気がして……。予想が当たると怖いので、私は自分のティーカップをじっと見つめることにしました。

「話がまとまったようで何よりだ」

「は、はい！ 恐れ多くもこのような新参者に、お優しき配慮をしていただけること、光栄でございます……!!」

「ああ。この国の民であり英雄である男爵には今後も期待をしている」

期待、その言葉にバツとウイナー男爵が笑顔を浮かべました。

王太子殿下からの期待。確かにまあ、雲上人うんじょうひとがそんな風に言ってくれたなら高揚するかもしれない。失敗したと落ち込んでいたわけですから、特に。

ウイナー男爵のその様子にふっと笑みを作った王太子殿下は、言葉を続けました。

「周囲の環境が変わったことで苦労もあるだろう、そなたの娘もデビューの場で良き繋がりができて互いに支え合う友ができるといいな」

「む、娘のミュリエッタもその優しいお言葉を聞いたならば感激することと思います！ ありがとうございます!!」

支え合う友という言葉に王太子殿下がちらりとディーンさまを見て、二人して何故か頷き合っている姿はなんだかよくわかりませんが……この短時間でお二人は友情を育まれたのでしょうか？

二人の間にいらっしやるプリメラさまがにこにこしているの、いいんですけど。

ああ、なんと可愛らしいことでしょう!!

(なんにせよ、いい関係を築けたのならいいことですものね)

ぺこぺことお礼を言い続けるウイナー男爵に、王太子殿下が一つ頷いて「そういえば」と言葉を続けられました。

「予定よりも早く到着したようだが、昼食はどうした？」

「え、いえ、あの……た、食べておりません」

真っ直ぐなその視線にウイナー男爵は、再び体を縮めて下を向いてしまいました。

ですがその姿に王太子殿下が気を悪くする様子はありません。

緊張のしすぎで食事が喉を通らず、遅刻なんてできないと予定よりも早く出てきたとかそんなところでしょか？ それなら私もわかります。

「ニコラス、食事をウイナー男爵たちの分も準備しろ。共にテーブルをと言いたいところだが、あまり娘を一人しておくことは男爵も心配だろう。二人の分は客室の方に準備をさせるように」

「あ、ありがとうございます……!!」

「かしこまりました。すぐに準備をいたします」

そしてニコラスさんは、そのまま王太子殿下に向かって綺麗なお辞儀をしました。

ああ、これで茶番は落ち着いたのかなと私は内心ほっと胸をなで下ろしたものです。

「では、男爵さま。客室までご案内いたします」

「よろしく願います」

ウイナー男爵もほっとしたのでしよう、来た時よりは幾分か緊張も薄れている様子でした。ただまあ、客室で待っているであろうミュリエッタさんはきっと今頃、荒れてるんだろうなあ。

(あれ、でも……いえ。まさか、でも……そうとしか思えない)

私はこのウイナー男爵の到着に関して、ニコラスさんが仕組んだのではと思いません。

おそらく本来の時間よりも少し早く着くように、御者に指示を出したのではないでしょうか。

王子宮から迎える馬車が出ているのに、時間を誤るようなことはないはずなのです。

王城で勤める御者ならば、こういった場で時間に対して遅れることはもとより、早く着きすぎていけないということくらい知っています。

何かトラブルがあつて馬車の運びが調整できないということも考えられますが、王族直轄の森に向かうのに、他の馬車とぶつかることなどあり得ません。道だつて整備されています。

そのことを考えると、時間通りに着かないほうが不自然なのです。それなのに我々の昼食が終わらないタイミングで到着したことを考えると、ウィナー父娘はかなり早く着いた計算になります。

気づくのが遅いというか、まさかそんな姑息こそくなことをする必要がどこにあるのか、意図こころがまるで見えなくて……なんでしよう、怖いなあ！

(口頭での招待なら、証拠も残らないわけですし)

思わずヒゲ殿下を見れば、にやりとした笑みが返されましたよ。

その笑顔の意味はどつちだ？！

意味を図りかねて、私はアルダールの方を見ました。

彼ならわかるかなと思いましたが、私の視線に気が付いたアルダールは小さく苦笑を浮かべただけでそれ以上何かを教えてくれる様子はありません。

(……つまり、私はあまり深く関わるなつてことでいいんですね？)

多分、そういう意味で合っていると思うのですけれども。

にこにこ楽しそうにしているプリメラさまのお気持ちが暗くならないならば、まあそれで構わ

ないのでしょうが……楽し気なこの会の裏で何が行われているのかなつて思うと、アレですよ。

オトナつて、コワイ。

そこに尽きますよね！！

私なんてこう、しれーつとんでもないような顔してこの場に座っていますけれど、ぶっちゃけこの中で一番下っ端はなうえ、モブですからね！

内心、こんな大人の陰謀渦巻いているような場所になぜ私みたいな人間が招かれているのか、心底不思議でしようがないのですけれども。

(私はしがない侍女なんですよ！)

いやまあ筆頭侍女している時点ではがなくてはならないのか？！

よし、言い方を変えましょう。私はこの場においてはしが、ない子爵令嬢です！

うん、これならしっくりくる。

(つて違うわ！ そういうことじゃない!!)

ああーもう、どうしてみんな、平和に生きていけないのでしょうか。

いえ、わかっていますよ。ミユリエッタさんの今までの行動が貴族社会に、ちよつとばかり相応あさわしくない行動だつたつてことですよ。

だから監視だけで済んでいた状況から、もうそれじゃ足りないつて判断が下されてのニコラスさんですもんね！

わかってますよ、ちゃんと理解しておりますとも。

で、私絡みで……というか、アルダール絡みで彼女が妙な行動を起こして、ひいてはクーラウム王国の品位を落とされては困るってことですよね？

(そういう意味で捉えていますか、違うのかな)

まあなんにせよ、私としては積極的に接点を持っているわけじゃないし、アルダールだってそうなんだから、逆にこんな場を整えられちゃったことの方が怖いんですよ。

デビューの場があるからそこに行くようにねって教育係さんを通じてお知らせしてくれば、それで済んだ話じゃないですか。

(……あえてこの場で、仲間外れ状態で、多分、今頃は父親からさっきの話を聞いているであろうミュリエッタさんの気持ちを考えると、ちょっと……うん、いや大分、同情的な気持ちになるっていうか)

そんな風に考えるのは良くないって、前も自分で思いましたけどね。

それでもこのやり方は、随分と意地が悪いように思うのです。

プリメラさまはどこまで知っているのだろう、とか……私だけが知らなかったのかな、とか……まあこう、ぐるぐるモヤモヤするっていうかですね。

わかっちゃいるんです。理性では。

これは、『英雄』というネームバリューを持つがゆえに生じた問題点。

それだけ彼女たち父娘は国内外から注目を集め、民衆にも影響力があるということです。

民衆から貴族になるという羨望と憧憬を一身に集める立場となった彼らが、軽率な言動を取るこ

とを許し続ければ国としての示しがつかず、だからといって厳しくしすぎては国家は民衆の反感を買う……そうならないためにも必要な『教育』なのでしょう。

(でもこれ、逆効果になつたりしない?)

ミュリエッタさんが私と同じ転生者だとして、前世の感性のまま行動をしていたら。

前世を物差しにして行動していると考えると、ちょっとよろしくない気がします。

この世界における一般常識の物差しと、彼女が描く『ゲーム世界』の物差しではかなりの違いがあるはずです。それがストレスにならないか。

そして、ストレスを抱えた彼女がどんな行動をとるのか、今までよりも予想できないことをしかすんじゃないのかって不安がひしひしと……。

「ユリア」

「はい！ なんとごさいますよう、プリメラさま」

変な思考の渦に嵌まりそうな私に、控えめで可愛らしい声が聞こえました。

そりゃもう素早く返事をしましたね！

だつてプリメラさまに呼ばれたのなら、なによりも笑顔で返事！ これは外せません。

「あのね、もし、よかつたら……なんだけど、あの、ウイナー男爵とミュリエッタ嬢にね、マシユマロを分けてあげられないかしら。今回は同じテーブルを囲むことができなかつたけれど、ここまですいらしたのだから。せめて何かしてあげたいと思って」

「プリメラさま……!!」

ああ、私がぐるぐると悩んでいるっていうのにこの天使！

天使がいます!! なんてお優しいのでしょうか……!!

そうよね、やらない善よりやる偽善って何かで聞いたことある気がしますしね!!

私がしてあげられることなんてないのだから、せめて美味しいお料理……は、王子宮の方々に任せるとして、デザートにマシユマロくらいは楽しんでくれたらいいですよね!

「かしこまりました。数に限りがありますので、そう多くは差し上げられませんが……私のマシユマロでよろしければ、喜んで。ウイナー男爵さま方のお口に合えばよろしいのですが……」

メッタボンに手伝わってもらったから形も綺麗だし売り物と遜色そんしよくない出来映えと思いますが、それでも手作りお菓子で大丈夫だろうかと不安になる私にプリメラさまは笑顔を見せられました。

「このお菓子、わたしは大好きよ! ね、兄さま、デインさま、いいでしょう?」

「ああ、プリメラの好きにすればいい」

「自分もいいと思います。王女殿下の優しさが、ウイナー男爵方にもきつと届きますよ!」

「わたしのユリアが作ったお菓子なもの、きつと喜んでくれると思うわ」

「今回はメッタボンも協力してくれたので、味も絶品でございますよ」

「わあ! やったあ!」

メッタボンの顔を思い出して、私とプリメラさまは笑い合いました。

プリメラさまの気遣いによつて、場の空気が一気に、こんなにも温かなものになるなんて!

やっぱりうちの姫さまは、最高です……!!